
SEASONS

あめこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SEASONS

【Nコード】

N3134F

【作者名】

あめこ

【あらすじ】

あまりにも四人で居ることが当たり前になっていた。けれど時間は進む。崩壊は止められない。――「季節」たちの話を一話完結の短編集という形で綴っています。時間軸はバラバラですので、どこからお読み頂いても構いませんが、上から順に読んでいったほうが分かりやすいかと思います。

季節たちの一瞬の日常

「もう嫌だ、物理なんてこの世から消えればいい」

そう忌々しそうに物理の教科書を投げ出したのは夏川だった。それに秋野はわずかに笑い、「ばかだなあ」と言った。

「ばかとはなんだ、ばかとは」

と、すかさず夏川が反論する。

「よく考えてみるよ」

と、秋野は夏川のほうへ身を乗り出し、抑揚をつけて喋りだす。まるで園児に諭す教諭のようだ、とは冬森が常日頃思うことであった。「この世から物理が消えたとして、果たしてこの世界は成り立つのか？」

「そういうことを言っているんじゃない。俺は学問としての物理が消えればいいと思ってるんだ」

「じゃあ仮に消えたとする。そしたらどうだ？物が落下するのもまあ不思議、自転車が加速するのもまあ不思議！と、なってしまうんだぞ、耐えられるか、いや、耐えられない」

「俺はそれでも構わない」

そうしていつものように二人の口論が始まった。くだらないな、と思わず冬森がこぼすと、二人がいつせいに振り向いて「なんだって！」と怒鳴ってきた。

「いや別に」

多少勢いに圧されつつ先を促せば、また口論は再開された。ため息を吐く。するとそれに今まで本を読むのに勤しんでいた春海がようやく顔を上げて尋ねてきた。

「なんだまたため息を吐いているのか、幸せが逃げるぞ」

「もうとつくに逃げてる」

冬森が苦々しげに言った。「お前らと出会った時点だな」

春海は「それもそうだ」と無邪気に笑い、「でもつるんでいるの

は自らの意思だろう？」と猫のように目を細めた。

「まあ、そうだな」

冬森は今度こそ盛大に息を吐いた。春海はそれに苦笑すると、「おい、そろそろやめろよ。冬森が心労でハゲる」と相変わらず喧々囂々とやっている二人に向かって声を上げた。

その声に二人は、「おつといけない、ごめんな冬森。このほかがあり得ないことを言うもんだから」、「そうだなそろそろやめよう、冬森のためにも。冗談も解さないカタブツは放っておいてさ」などと互いに相手を睨みつけつつ口々に言い、春海を挟んで同時にソファに腰掛けた。

まったく仲がいいんだか悪いんだか、と春海は思うが、口には出さずにおいた。また火種になりかねない。

「また物理の点が悪かったのか」

と、冬森が問えば、夏川は「そうなんだ」とげんなりして答える。

「もう悪かったなんてレベルじゃないね。ひどい」

そうして落ちこむ様は、まるで主人に叱られた犬のようだ、と、やはり声には出さずに春海は思う。うっかり口に出そうものなら、夏川が怒り出すことは明らかだ。

「ならなんで物理を選択したんだ。お前は生物が好きだっただろう」
そう春海が言くと、夏川は「だってさ」と唇を尖らす。

「お前ら物理じゃん。俺はね、少しでも長くお前らと時間を共有したかったんだよ」

肘掛けに肘をつき、顎を支えていた秋野がずり落ちた。吹き出す。

「それで選んだのかよ、あほか」

「ほかの次はあほかよお前。口の悪い奴だな」

「お前よかはいいいね」

「ふざけんなインテリ」

「インテリは侮辱用語ではない」

「うぜえ！」

そうしてまた始まる言い争いに、もう止める気は起こらず、春海

と冬森は互いに顔を見合わせて苦笑した。

「まあとにかく、少ない時間を目一杯共有しないとならないわけだな、俺たちは」

諦めたように言う冬森に、春海は「うん」と頷いた。

残された時間はあとわずか。

季節たちの一瞬の日常（後書き）

とりあえずは日常のワンシーンを一編。自分の書きたいところをそのままに書いていきますので、気長に読んで頂ければと思います。

ここまで読んで頂きありがとうございました。

季節たちと崩壊の足音

使い古されたソファはぎしりと鳴り、年月の経過を夏川に報せる。あれからもうどのくらい経ったのかなあ、などとぼんやりと思う。ただ、思い返すにはひどく億劫に感じた。疲れきっていることは自覚している。

四人で居た頃、狭く感じたこの四角い部屋は、今ではただっ広いだけの空間で、虚しさを募らせるだけのものに過ぎない。もう少し一緒に過ごしていたかったけれど、と、もう何度考えたか分からない思いを巡らせる。窓から差し込む陽射しは強く、開け放されたそこから、生温い風が絶え間なく吹き込んでいた。夏川の半袖のシャツを、いたずらにはためかせる。

冷たい風が懐かしいと思った。鳥肌のたつような冷気や、白く染まる息、容赦なく全身を這う冷え切った風。

あんなに忌々しかったものが恋しくて仕方なく、咽から手が出るほど欲しくてたまらなかった。もうこの身に感じることなどできないと知ってはいるけれど、でも、それ故に求めてしまう。仕方のないことだった。人間とはそういう生き物だ。

「なあ、春海」

「ん？」

閉じた目蓋を両腕で覆い、ソファにすっかり身を委ねながら夏川は尋ねた。その背にもたれ掛かり、コンクリートの床に腰を下ろす友人は、相変わらず本を読むのに勤しみつつ答える。夏川はほっと息を吐いて胸を撫で下ろした。

「なんだ居るのか」

「居ないとも思ったのかよ」

春海がわずかに笑う気配がする。同時に、乾いた紙を捲るかかささした音が聞こえた。「居ないほうがよかったか？」

「まさか」

と、夏川は力なく苦笑した。

「ひとり嫌だよ」

春海はそれには答えずに、しばし沈黙すると、やがて静かに本を閉じた。立ち上がった夏川の向かいのソファに腰を下ろす。その手には、どんなときも手放さなかった本はない。そのスプリングもまた、ぎしりと鳴る。

「夏川」

「なんだよ」

「俺ももうすぐここから出ていくよ」

ぴくりと夏川が身じろぎをした。それはむしろ震えたと言ったほうが正しいかもしれない、怯えたような動きだった。

「こればかりはどうにもならないことだからな」

春海は、夏川のそんな反応には気付かない振りをして続けた。できるだけ淡々と、事実だけを述べるようにしているのが分かる。その表情には恐れも感傷も浮かんではいなかった。無表情のままである。

「ここから出て行って、どうなるのかは分からない。でも、冬森も秋野もそうやってここを去っていったのだから、不思議と怖くはないんだ」

そうしてやっと、春海はその顔に表情を戻した。泣き笑いのような、彼にしては珍しいものではあったが。

「だから、もうすぐお別れだ」

「それは一体いつなんだよ」

夏川が口を開く。へんに上擦った調子の声で、まるでさがるような口調だった。

「さあな」

「さあつてお前」

「明日かもしれないし、一年後かもしれないし、もしかしたら今かもしれない。分からないけれど、でも、もうすぐ俺も居なくなる」
「それだけは分かるんだ」

その言葉にようやく腕を下ろした夏川は、向かいで静かに自分を見つめている春海に視線を合わせた。

「ごめんな」と、春海が呟く。

「それ、誰に言ってるの」

「誰だろう、自分にな」

「俺じゃないんだ」

「どうだろう」

「……お前は悪くないよ」と、夏川は俯いた。

そういえばこんなやり取りを以前もしたことがあったな、と春海は思い返す。冬森が出て行くときだ。

冬森は、四人の中で一番はじめにここを去らなければならなかった。得体の知れない恐怖が四人の空間を支配するなか、何で、どうしてと激昂する夏川に、彼は本当に申し訳なさそうに「ごめんな」と謝ったのだ。

あのときは、どうして冬森がそう言ったのか全くとっていいほど理解できなかった。むしろ謝らなければならないのはこちらのほうだったし、冬森が謝ることなど何もなかったのだ。

でも、あいつはごめんと言った。

それに続く秋野も、いつものように皮肉を吐きながら、しかしもの悲しそうに冬森と同じ言葉を残して出ていった。語尾が少し震えていたとも思う。夏川は秋野と一等仲がよかったから、彼が去ってからしばらくは鬱ぎこんでしまつて、春海は慰めるようなたちではないただ見守るしかなかったけれど、元気だけが取り柄のような夏川が落ちこむ様を見ているのは、ほんとうに辛かった。

そうして何もできないまま、結局自分も消える。今なら、冬森と秋野の心境も解るような気がする、と春海は思っていた。いざそのときを迎えなければ定かではないのだが。

「なあ、春海」

ふと夏川が語りかける。

「冬森も秋野も、謝って出ていったけど、それって、俺がひとりに

なるからだったのかな」

春海は何も言えず、夏川の次の言葉を待った。夏川は、視線を窓の外へと向けながら続ける。

「でも、考えたんだけど、結局さ、誰も悪くなかったと思うんだ」
そうして久しぶりに笑みをみせる夏川。けれど彼らしくない、かさかした笑顔だった。

「仕方ないことだったんだよ」

だからお前も、謝る必要なんてないよ、と言い、夏川は腰を上げた。窓に歩み寄り身を乗り出す。その外は真っ白で何も見えない。時間と光と温度と風、それ以外分からなくなったのはいつからだろう。

春海は、変わらず吹きつけてくる風に身を任せるように目を細めた。逆光で夏川の後ろ姿が白く発光しているように見える。

彼だけは決して変わらないし、ここから去ることもないだろうけれど、それほど儚く悲しいこともない、と切なく思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3134f/>

SEASONS

2010年10月27日13時55分発行